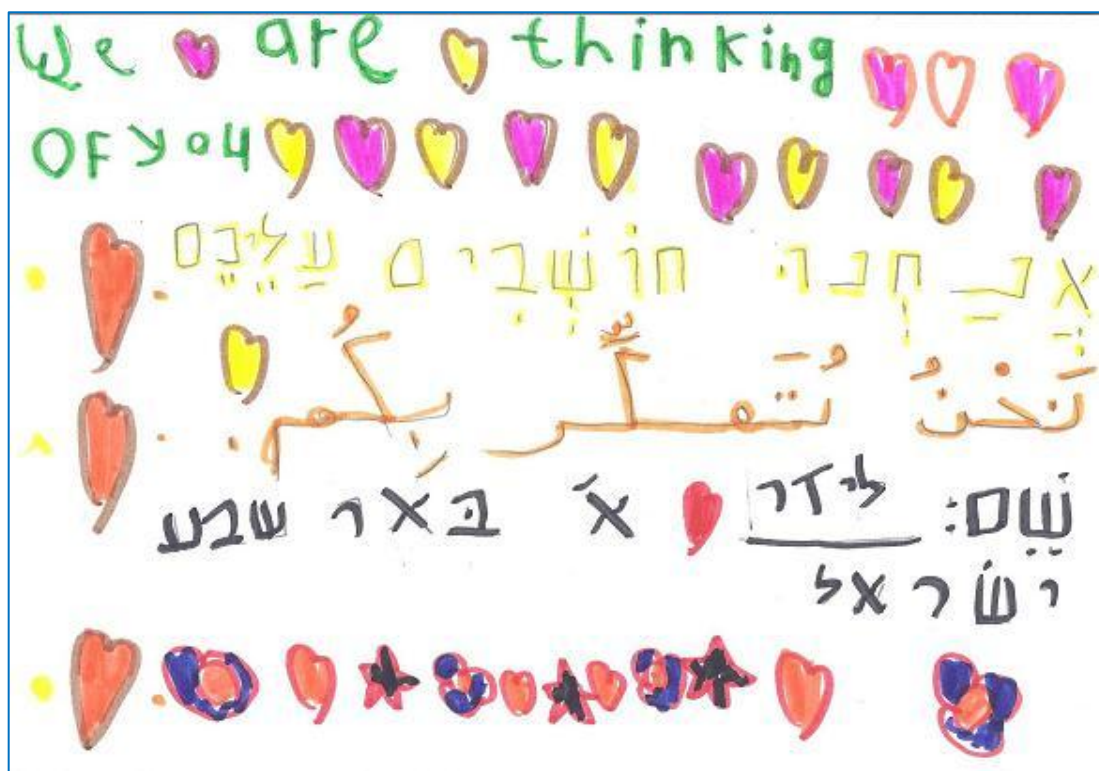




ケレン・ハオール、第11号、2011年5月15日発行

東日本大震災を聞いて
“We are thinking of you”

ベルシェバ・ハガール・ハンド・イン・ンハンド校1年生から



ご来イ中の中村暢晃／育子様ご夫妻を3月10日にベルシェバ・ハガール・ハンド・イン・ンハンド校にご案内しました。その翌日、日本は東日本大震災に襲われました。この災害をクラスで聞いたハガール校1年生は、「私たちはあなたがたのことを考えています」と英語、ヘブライ語、アラビア語で書き入れた絵を描きました。これはメールで、一燈園の燈影学園の子どもたちに送られた絵の中の1枚です。一燈園には2人の震災児が避難し、燈影学園で学んでいるとのこと。 (松村記)

Yes, We Can!

大阪千里天神の中村暢晃／育子ご夫妻が3月8日早朝イスラエルに到着な
された。翌日3月9日には、ジズレル平野にあるキブツ・メルハビヤの文化
ホールで、シャニー少女合唱団とハンブルグ少女合唱団の合同公演コンサ
ートが開催された。ユダヤ人、アラブ人、ドイツ人の少女が、同じ舞台に立っ
た。10年前にこの様な公演が可能だっただろうか。

天から降ってきたような清らかな歌声

シャニー少女合唱団とハンブルグ少女合唱団の合同公演

中村育子



私たちは、イスラエルに到着し
た翌日、ジズレル・アート・セ
ンターから、シャニー少女合唱
団とハンブルグ少女合唱団の合
同公演コンサートに招待されま

写真上：シャニー少女合唱団、下：ハンブルグ少女合唱団

した。シャニー少女合唱団の構成はユダヤ人とアラブ人の混成になっていま
した。松村様と私たちは、会場に大変早く到着しました。普段はあまり見る
機会のない本番前の練習風景に出会い、楽しませていただきました。



写真：中村暢晃／子育て夫妻 於ジズレル・アート・センター

いよいよ本番が始まり、シャニー少女合唱団とそれに続くドイツからのハンブルグ少女合唱団が元気いっばいの伸び伸びしたコーラスを披露しました。その清らかな声は、天から降ってきたような歌声で心が洗われるのを覚えました。

二つの合唱団のドレスの色は、真っ赤な目の覚めるような感じでした。それを両合唱団が着込み披露する姿は、何にも代えがたい天からの花のような贈り物と映りました。

動作表情には両合唱団の違いが大いに出て、私には興味深く感じられました。ハンブルグ少女合唱団は表情が硬く、はにかみ気味で、日本人とよく似ている気がしました。一方、シャニー少女合唱団は本番中であろうとリラックスした普段着のままの感じで、失敗を恐れないという姿勢でした。両民族の違いを見せられ、ほほえましく思ったものです。これからも機会があれば、ユダヤ・パレスチナ合同編成のシャニーとドイツのハンブルグ少女合唱団が共に世界の平和の象徴として、仲良く羽ばたき続けてほしいと願っています。
(写真提供：中村ご夫妻)

Yes, we can! 私に課した5つの使命

キリスト教聖公会大僧正、リア・アボ氏と再会

千里天神 宮司 中村暢晃

永年にわたる様々な人々の深いご縁とご協力によって、3月7日午後関西国際空港から日本を発ち、ローマ・フェミチーノ空港を経由し、8日未明テルアビブ・ベングリオン空港へ降り立つことができました。乗り継ぎを含め長い飛行の終わりに安堵しました。到着時の機外はやや湿気を帯びて暗く、「闇の中の静けさ」に、私は中東を含めたこれからの人類の運命を感じずにはおれませんでした。



写真：右からリア大僧正、中村氏、松村とガイドのエイフード氏

空港施設内に一歩足を踏み入れ、眩いばかりの照明の下で入国手続きを済ませると、ようやく普段の自分が戻ってきたように思われました。映画やテレビ、書物などで子供のころから描いてきた数千年以上に及ぶ独自の文化と文明、風習、宗教や民族の違い、ユダヤ王朝、ローマ帝国など様々な為政者による明と暗の歴史に直接触れる機会を与えられました。

今も、イスラエルではユダヤとパレスチナ両民族がしのぎを削り、互いの主張を前面に押し出して、それを取り巻く周囲の多くの国々や地球の裏側の国々まで巻き込んでいます。世界の火薬庫と称されて久しいのです。主張を通す為に恒常的に繰り返される人命軽視。この状況を改善できなければ、人間の尊厳はどこにあるのでしょうか。人としての温かい尊い価値、それを実践する為にこの世に生まれて来たとするれば、宗教、道徳、教育の本来果たす役割を、もう一度見直すことが求められていると思います。

未来を担っていくであろう多くの子供たちに、そうした機会を一つでも増やす方法を真剣に考えたい、その日本人の一人として今回中東にまいりました。

このたびのイスラエル出向には五つの柱の使命があります。

1. ユダヤ・パレスチナ両民族の幼少からの和解への道を探り推進する。
———ハンド・イン・ハンド校への支援。
2. ユダヤ・パレスチナ両民族の和解への道を特に芸術・音楽（魂の世界）を通して推進する。
———シャニー少女合唱団への支援。
3. 宗教界（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教等）との連携を深め、互いのアイデンティティに尊敬の念を深め、互いの存在を認め合い共存の道を推進する。
第一歩として今回キリスト教聖公会の大僧正、リア・H・アボ氏とナザレにて再会を果たし、更なる宗教協力を要請し、共に歩むことを確認した。次回はユダヤ教、イスラム教等の指導者との連携に着手する。
4. イスラエル・テルアビブ在日本大使館に赴き、一等書記官と面談し、イスラエル・日本国交樹立 60 周年記念事業の一環として日・伊両国の音楽家の交流を推進する。
———千里天神とも縁の深い世界的な名バイオリニスト古澤巖氏を

軸とし、国際交流基金の支援、援助を受け、芸術を通じた魂の交流を実現する。(今年中に申請を完了し、来年 2012 年イスラエルでの交流演奏会実現の為の道筋を開きたい。)

——世界的な指揮者ズービン・メータ氏を再来年(2013 年)大阪にお招きし、世界平和のための五つの総合芸術祭を実現するよう着手したい。

5. 今回フランスへも赴き 10 年来深い親交を続ける政府関係者の協力を得てヨーロッパからも中東正常化に向けての交流を活発化するよう要請する。

●今回限られた時間の中で数多い目的に向けての活動は、長い間地道に心の交流を保ち続けている人々、京都一燈園の西田当番様、フランスのアルザス州元開発公社総裁の C E E J A (アルザス・欧州日本学研究所) アンドレ・クライン会長、特に様々な分野の方々と人道支援を続けておられるイスラエル在住の日本人松村光子様のお力が無ければ実現できなかったと思います。この紙面を通して、これらの人々と現地で関係して下さった多くの方々に、心より感謝申し上げる次第でございます。(写真提供：中村ご夫妻)

第二回 現場からの報告 -ヤルコン川水源地見学

環境の大切さを現場で学ぶ

ハヨベール中学校 エステル山崎

共学共存の校外学習活動は、ユダヤ側とアラブ側が毎回当番制で活動日の接待をします。それは朝食のサンドウィッチ作りと、10時の軽食作りです。当番の学校では、出発前に通常より早い時間帯に学校に集まります。そして全員が協力して朝のサンドウィッチを手早く作り、その後校外学習に持参する軽食も準備します。準備が終わる頃には、招待される側の生徒たちがバスで到着します。今回はクファル・カセム村の「エーベンシナ中学校」へ「ハヨベール中学校」の生徒が遠征訪問しました。到着すると生徒たちは教室で仲良く楽しい朝食を一緒にとりました。

朝食が済むと全員バスに乗り込みました。イスラエルの教育省では、校外活動には警備保障派遣のガードマンの同行が義務付けられています。もちろん安全を守るための警備です。今回も警備派遣を要請しました。こうしてヤ

ルコン川の見学場所へ出発しました。目的地に着くと二つのグループに分かれました。一つはスワード先生のグループで、もう一つは私が引率するグループです。各々のグループに、自然環境保護活動の現場で活躍しているリーダーがガイドとして同行しました。二つのグループは、ユダヤとアラブの生徒数が半々になるように先生が指示しました。

現場では、最初に円陣を作り大地に座り込んでリーダーの説明を聞きました。近代化の波で失われつつあるヤルコン川周辺の自然環境を昔のような環境に戻すためには、全員が何をしなければならないかの説明を聞きました。生徒たちは、現実の問題を目の前にして真剣に話を聞きながら、自分たちは今何ができるかを考え始めました。

円陣で説明を聞いた後、いよいよヤルコン川の水源地へ歩き出しました。そこは、とてもどこかで景色の良い、自然の香りがいっぱいの場所でした。この水源地には、紀元 100 年ごろにローマの支配下で築かれた建造物も遺跡として残っています。その後、大きな砦も建造され、さらに十字軍もここに砦を築いたという由緒ある場所です。現在は国立公園になっていて、休日などは大勢の人々が訪れています。こうした歴史のある水源地なのに、人々は近代化の流れの中で環境問題を疎かにし、環境破壊が進んでしまったのです。



写真：ローマの建築遺跡で説明を聞く子どもたち

私たちは、自然環境を取り戻す活動に参加することによって、共学共存精神も学ぼうという目標を設定しました。環境問題と共学共存活動の主旨を理解して応援してくれるイスラエル国内の電力会社が、活動資金の全面援助を約束してくれました。現地の環境問題リーダーへのガイド料金やバス代金、そして校外学習に不可欠である警備保障のガードマン派遣料金、国立公園入場料などは、この援助資金で支払われました。生徒たちが負担したのは、朝食費や軽食用の食材費だけでした。

この食材費ですが、招待される側の生徒たちは負担しません。当番になる側の生徒たちが、その都度負担する約束をしています。生徒たちは活動日の食材購入費を確保するために、各々の学校で軽食やお菓子を休憩時間を利用して校内販売しています。その利益を活動資金に組み込んでいます。これは保護者への負担を軽減させるために、生徒たちが考え出した自主活動なの

です。このように共学共存の校外学習活動では、同じ食べ物を分かちあって食事することで、自然に親近感も育ちます。

今回、環境指導リーダーがまとめの話の中でゲームを活用しました。毛糸の球から毛糸を引き出して、生徒一人ひとりを繋いでいくゲームでした。生徒たちに植物や昆虫や動物の絵葉書を持たせ、環境の中でのそれらの存在を確認させてから毛糸で一本の線につなぎ、相互関係を目に見える形にするのが狙いです。こうして円陣になった生徒たちが一本の毛糸で結ばれた時、リーダーは生徒たちにこの毛糸の線の意味を説明しました。

自然が一カ所壊された場合を想定して、その植物なり動物なりが環境に適応できずに消えたらどうなるのか、具体的に説明したのです。花が無くなると昆虫がいなくなり、昆虫がいなくなると小鳥がいなくなるという具合に、毛糸を手で握っていた生徒から次々に毛糸を手放すように指示しました。それまでピンと張られていた毛糸が、次々に弛んでゆく自然環境破壊の現象の説明だったのです。このゲームで、生徒たちは完全にその意味が理解できたのです。



写真：自然環境のバランスを学ぶ子どもたち

つまり、自然環境のバランスも平和のバランスも、皆が協力し合ってこそ成り立つのであって、バランスを崩す人が一人でも出てくれば、一本の糸が次々に緩みだして、全体のバランスも崩れてくるのが理解できたのです。
(翻訳と写真・山崎智昭)

ジュリアーノ氏はアラブ人？ユダヤ人？

中島ヤスミン

2011年4月4日、私はいつものように夕食時に夜のニュースを見ていた。すると「ジェニンの難民キャンプでジュリアーノ・メル・ハーミス（52歳）、射殺さる」という見出しが映った。と共に、彼の死を悲しむ難民キャンプの人々の映像が映し出された。私はこの時、まだジュリアーノがどのような人物かは分からなかった。ただ名前からしてキリスト教系のアラブ人かなと思うくらいだった。そして難民キャンプ内の殺人事件にしては、インタビューを受けている人たちはいつもとは異なる感じがした。そして徐々に次のようなことが分かった。彼はイスラエルのみではなく海外でも有名な俳優・映像作家で、パレスチナ人権擁護の活動家でもあり、親子3代にわたってユダヤ／パレスチナ両民族共存思想の持ち主であった。彼自身の体にはこの両民族の血が流れているのだった。

ジュリアーノの母、アルナ・メルはイギリス委任統治下の1931年に北部ガリラヤのロッシュ・ピナ（注1）で生まれた。父親は科学者で、当時上ガリラヤ地域に蔓延していたマラリア撲滅に貢献した。その頃、ロッシュ・ピナの近くにはアラブ人の村アル・ジャウナなどがあり、彼は民族の区別なくこの地域の風土病を克服することによって地域に平和をもたらそうと考えていた。

1948年、イスラエルの独立戦争でもある第一次中東戦争では、母アルナはパルマツハ（注2）隊員として青春時代を過ごした。その後イスラエル共産党（マキ）の黨員になり、主要メンバーの一人でナザレ出身のアラブ・キリスト教徒サリバ・ハーミスと結婚して、3人の息子を授かりジュリアーノはその息子の一人だった。

ジュリアーノは、このイスラエル国籍の両親（注3）のもとでナザレで育った。イスラエル人の義務である兵役に従事し、イスラエル国防軍の落下傘部隊に所属していた。その後俳優として活躍し、多くの映画や舞台でユダヤ人としての役もこなしている。

母アルナは、その後もパレスチナ人の人権擁護の政治活動を続け、第一次インティファダ時代（1987-1993）（注4）に、ジェニンの難民キャンプ内に「フリーダム・シアター」を立ち上げた。これは当時、占領によって日常的な怒りや暴力の中にいる子どもたちに対して、別の方法で感情を表す場所としてつくられた。その中には演劇のクラスもあり、ジュリアー

ノは母に協力して演劇指導者として携わった。（これらはジュリアーノが監督したドキュメンタリー「アルナの子どもたち」に描かれている）

その後2001年から再びアルアクサ・インティファダ（注5）が始まり、2002年のイスラエル軍によるジェニン攻撃で、アルナの創った「フリーダム・シアター」も破壊された。93年に他界したアルナの意味を次いで、ジュリアーノは2006年、アルナの子どもたちの一人、ザカリヤ・ズベイデ（注6）とともに、「フリーダム・シアター」を再開した。ジュリアーノは彼が再開したこの「フリーダム・シアター」の前で覆面の男によって近距離から5発の弾丸を撃ち込まれたのだ。

ズベイデは、この殺人事件は巧妙に計画された暗殺事件だと話している。またパレスチナ評議総理大臣、サラーム・ファヤッドもこの殺人を強く非難している。

これが事件の流れであり、背景だ。誰が彼を殺したのか？

大方の見方は、この殺人は彼が行っているアラブ／ユダヤ共存の活動に対する非難であり、伝統的なイスラム思想にはジュリアーノの活動は先進的過ぎるとの見方であった。事実その後容疑者として逮捕されたのは、この難民キャンプの住人であった。

先日私は偶然仕事で、ベツレヘムのあるパレスチナ難民キャンプに行った。「ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会」の援助で、イスラエル国内でパレスチナ自治区の子ども達とイスラエル国内の子どもたちの会合が持てないかという話が出ていたので、この難民キャンプの児童活動担当者に打診してみたところ、返ってきたのは、「できない。なぜなら、イスラエル人に会うことは私たちの間では裏切り行為になる」との返事だった。しかし、翌日別のパレスチナの村を訪問した時に、同じような質問をしたら、今回は肯定的な返事が返ってきた。

このパレスチナ人は、自分たちが住んでいた村を追われ、難民キャンプという不確定な日常を60年以上も続け、同じアラブ人の土地とはいえ、他人の土地に住まわせてもらっている負い目のある人たちである。彼らはイスラエルの建国によって村を追われた訳ではないし、イスラエル国内ではなく占領地に生活しているため、国籍や国民としての権利がない人たちなのである。またこの難民キャンプの人々の出身村にはイスラム教徒のみが住んでいる。一方、イスラエル国内ではキリスト教徒とイスラム教徒が昔から共存している村もあり、パレスチナ自治区とイスラエル国内のパレスチナ人では大きな違いもある。

実はアラブの社会の中にも、いろいろな人がいる。都市で種々な人と共に

育ち洗練された近代教育を受けた人たち、地方の農村や砂漠で伝統的な暮らしをしてきた人たちなどだ。その中でもイスラエルの建国によって難民として西岸地区やガザで人権も否定され、難民キャンプ生活を強いられている人たちが最も悲惨である。しかしその人たちの人権を守る活動さえ、ある意味では極端な近代的思想として捉えられるのである。ましてや「敵との共存」などもってのほかと考える人たちもいる。

ジュリアーノの出生は、ユダヤ人からはアラブ人の血が流れる不穏分子、パレスチナ人からはユダヤ人の血が流れるスパイとして二重の否定を受けた。その中で彼が本当に渴望したのは、両民族の共存だったのだろう。2009年のラジオのインタビューで、彼は「自分は100%パレスチナ人であり、100%ユダヤ人である」とも答えている。

実はイスラエル／パレスチナにはこのような子どもたちが存在している。この子どもたちが、両民族から双方の架け橋として受け入れられる時に、本当の共存が現実のものになるのではないだろうか。

<注>

(1) ロッシュ・ピナ

1882年にルーマニアから移民した人々によって建設された。イスラエルでも最も古い時代のシオニスト農業入植村。

(2) パルマッハ

イギリス委任統治時代のユダヤ人地下防衛軍ハガナのエリート戦闘部隊。その後イスラエル防衛軍の母体になる。

(3) イスラエル国籍の両親

1948年にイスラエルが独立した時、イスラエル国土内に併合された土地に住んでいたアラブ人もイスラエル国民となるため、ナザレのアラブ人はイスラエル国民となる。

(4) 第一次インティファダ（1987年～1993年）

インティファダはアラビア語で衝撃、ショック、不安定を意味する。パレスチナ人のイスラエル軍事政権にたいする抵抗運動がインティファダと呼ばれ、抵抗、蜂起を意味するようになった。後にパレスチナ人の民族意識を高め、パレスチナ民族自決、パレスチナ国家建設への道を促すことになる。

(5) 第二次インティファダ（2000年～2005年） - 別名アルアクサ・インティファダとも呼ばれる。第二次インティファダがいつ始まったかは異論がある。2000年7月11日から25日にキャンプ・デービッドでオスロ条約施行のために行なわれた中東平和会議の失敗にあるという説がある。一方、2000年9月29日に、当時のイスラエル首相アリエル・シャロンがユダヤ教徒にとって「神殿の丘」と呼ばれる最も聖なる場所、同じ場所でイスラム教徒にとってはアルアクサ寺院と呼ばれて第3番目に聖なる場所を訪れたことにあるという説もある。

(6) ザカリヤ・ズベイデ:

イスラエル報道機関では、彼はアルアクサ・インティファダ時、アルアクサ戦闘部隊戦士だったと紹介されている。少年時代はアルナのフリーダム・シアタのメンバーで自宅二階がシアターの練習場だった。ドキュメンタリー「No Child is Born as a Terrorist」でズベイデがフリーダム・シアター活動に戻った理由として、戦いからは問題の解決は生まれないと語っている。

寄付金に関する報告

日伊支援会に献金して下さった方々のお名前と会計報告

2010年4月～2011年3月まで、次の方々が献金をしてくださいました。

団体 (敬称略、アイウエオ順)

一燈園、禱援会 (西田 多弋止)、世界宗教者平和会議 (WCRP) 日本委員会 (上杉千郷、平和開発基金運営委員会委員長)、世界芸術者平和協会 (The World Artists' Association for the World Peace 中村暢晃)

団体献金合計

NS. 53, 164. 32-

個人 (敬称略、アイウエオ順)

岸田 哲、須之内玲子、竹田篤夫/静子、宮原節子、物井恵一、匿名希望者2名

個人献金銀行振込み合計

NS. 1, 988. 92-

個人献金郵便銀行振込

NS. 902. 00-

昨年からの繰越

NS. 2, 000. 00-

06/04/2011 現在銀行残高

NS. 58, 128. 40-

06/04/2011 現在郵便銀行残高

NS. 902. 00-

為替による数字変動加算金

NS. 975. 16-

日伊支援会の支援金総残高

NS. 59, 030. 40-

(同日為替レート換算 **日本円表示 1, 399, 863円**)

以上、会計経理報告です。

2011年 4月15日 経理担当 エステル・山崎

(注 NSはニュー・シェッケルで現行のイスラエル通貨名)

編集後記

今回は年度末経理報告を記載しました。支援金の入金のための報告で事業支出報告は記載されていません。もちろん、事業報告詳細も記載したかったのですが、支援金はまだ支出されておられません。これは日本から届いた浄財である支援金を、指定された学校なり組織へ自動的に送金する前に、支援金受領の対象となる責任者に、当会作成の『透明度の高い使用申請書』に、使用目的を明記していただくことに固執しているからです。こうして活字で明記された書類返送を受けて、その記載内容を査証した後で支援金を送金するシステムを取り入れています。この手順は郵便による書類の往復配達時間や、祝祭日などの空白もありますので、若干の時間が必要となります。これが今回の支援金受領と支援金送金の時間的ズレとなっています。

現時点で銀行にある残高と支援金分配案を基にして、既にそれぞれの支援金の送り先へ『支援金使用申請書』と共に支援金の金額も伝えてあります。そして、先方からの書類返送を待っている状態です。当会としましては、この書類を確認したうえで、支援金受領書を返送するように要求して、支援金送金の手順をとっております。面倒な手順のようですが、間違いのない支援金送金のためには必要な手順と思っております。当然、これらの事業報告は次号の紙面で詳細をご報告する予定です。皆様のご理解をお願い致します。

(あき・山崎)



東日本大震災を知ったのは、ご来イ中の中村暢晃／育子様ご夫妻とエルサレムに向かう途中だった。私たちのガイドの奥様から知らされた。3月11日の午前中（イスラエル時間）のことだった。夕方、エルサレム近くのアブゴッシュというアラブ村のレトランで夕食を取った。

レトランに入り、私たちが日本人と判明すると、「今日、日本を襲った地震の災害を心から痛み、お見舞い申し上げます」とお店の人から言われた。ここで初めて被害の大きさが分かった。

イスラエルでも日本の地震、津波、原子炉事故が約2～3週間、テレビのトップ・ニュースになった。送られてくる映像はどれも地獄絵のように思われ、打ちのめされた。原爆を投下された広島、長崎で十分なのに、何故？と何度も何度も自問した。

このころ、イスラエル周辺のアラブ諸国は激動していた。これはアラブ社会が氏族、部族社会から脱却して近代市民社会へ移行しているように感じられる。しかし、この残酷で激しい変革はいつまで続くのだろうか。東日本大震災に代わってトップニュースを独占するようになったアラブ諸国の市民抵抗の映像も酷いものだ。生命の価値は一体どこにあるのだろうか。このことについても、何度も何度も自問した。

中東はこれから数年、不安定な時期になるのでは……と思った。同時に極端な宗教原理主義者が台頭しないよう願って止まない。世界市民による世界平和は、まだまだはるか彼方にあるように思われる。（松村光子）

NPO

ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会の目的

私達日本人とユダヤ人は、20世紀に人類史上前例のない最悪の惨事、広島と長崎への原爆投下とユダヤ人大量虐殺を経験した。私達は、ノー・モア・広島、長崎、ノー・モア・ホロコーストを叫び、核兵器や戦争、そして大量虐殺のない真の世界平和と民族の共存共生を希求する。

本支援会は、上記の考えに基づいて、イスラエルにおけるユダヤ人とアラブ人青少年の共同教育推進のために、内外に向けて献金依頼活動を行う。そして、イスラエル国内における二民族の青少年共学共存を推進する団体・組織や施設の共学共存教育活動を支援する。本会の機関誌「ケレン・ハオール」を通し、広く協力を求める。

ご支援金送り先

* 読者の提案により、郵便為替口座を設けました。番号は：**ISRAEL POST**
45009001-00000-21832292

宜しく願いいたします。

*小切手の場合は：

Mitsuko Matsumura; Kibbutz Dalia, 19239 Israel, または
Toshiaki Yamazaki; Kibbutz Gibat HaShirosha, 48800 Israel

* 銀行送金の場合は、山崎、松村にお問い合わせ下さい。

* その他のお問い合わせ先 (E-mail Addresses) :

Mitsuko Matsumura; mitsuko1941@gmail.com

Aki Yamazaki; yamazaki@netvision.net.il

ケレン・ハオール、第11号

(ケレン・ハオールはヘブライ語で暗闇の中へ差し込む「一すじの光」。希望を意味する)

発行所：ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会

Mitsuko Matsumura, Kibbutz Dalia, 19239, Israel

発行日：2011年5月15日

編集：松村光子、山崎智昭、山崎エステル、中島ヤスミン

校正：佐山宏子（成田）、田村徳章（東京）、村上宏一（埼玉）

題字デザイン：Ms. Danit Rot